

## P-209

### 新入職員担当業務について

横浜市立みなと赤十字病院 臨床工学部 臨床工学課

○宮島 敏<sup>1</sup>、大谷 英彦<sup>2</sup>、岡田 直樹<sup>3</sup>、小林 隆寛<sup>4</sup>、  
谷川 太一<sup>5</sup>、初鹿野夏気<sup>6</sup>、森下 和樹<sup>7</sup>、皆川 宗輝<sup>8</sup>

【背景】新入職員は新人研修計画書に則り12ヶ月間で、医療機器の管理業務を習得する。それと並行し、2年目から夜間・休日の緊急対応ができるよう血液浄化療法や各種生命維持管理装置について知識と技術の習得を行う。これらの入職1年目に習得しなければならない業務に加え、私が担当した新入職員担当業務について報告する。

【活動】4題のマニュアル作成、血液浄化療法施行時の工夫、Future Net Webシステム運用の改善について担当した。

【方法】各種マニュアルは、文献と情報の収集や製造販売業者主催の点検技術講習会への参加、使用する病棟や診療科との運用方法の検討を行い作成した。血液浄化療法施行時の工夫は医師と検討し確立まで努めた。Future Net Webシステム運用の改善は医療情報課との意見交換を行い要望の申請を行った。これらは当課として最終決定に至るまで、そのテーマごとに振り分けられた指導的立場の技士と相談しながら作業を進め、決定したのち関連部署に周知し実施している。

【結果・考察】新入職員担当業務は毎年異なるものであり、実施した内容はそれぞれ異なる。2題のマニュアルと血液浄化療法施行の工夫は、すでに実施している。その他は今後の課題となり継続中である。マニュアルは当課内で共通認識を持ち対応することができる術である。課題として与えられたマニュアルを迅速に作成することは、安全かつ確実な対応がとれる手段となるため、責任をもって取り組む必要がある。

【結語】新人研修計画以外に臨床工学課にかかわる業務を担うことで、社会人としての責任感と物事に取り組む道筋や他職種との連携体制を築くことができた。

## P-211

### PM植え込み患者のMRI撮影運用について

石巻赤十字病院 臨床工学技術課<sup>1</sup>、  
石巻赤十字病院 循環器内科<sup>2</sup>

○佐久田 敬<sup>1</sup>、魚住 拓也<sup>1</sup>、二瓶 雄基<sup>1</sup>、大橋 侑弥<sup>1</sup>、  
祐川 博康<sup>2</sup>

【諸元】

従来、ペースメーカー患者では、MRI検査は禁忌とされていたが、2012年10月より一部のメーカーから条件付きMRI対応のペースメーカーが発売された。MRI撮影を行うにあたり、患者の安全確保および、職員の混乱を避けるために検査体制の構築が必要である。

【目的】

条件付きMRI撮影を行うための体制を確立する

【方法】

従来のマニュアルに新たに条件付きMRI撮影の項目を設けるとともに、フローチャートを作成し関連部署の動きを含め検査体制を構築する。

【結果】

医療安全推進室と話し合いをもち、当院の運用の方針を定めた。安全対策として、MRI対応PM患者以外のMRI検査オーダーを出せないようにすること、「条件付きMRIカード」を確認できればMRI検査は実施しないことを定めた。MRI撮影前のPMチェックは循環器医師の指示のもと臨床工学技士がメーカーごとに作成したMRI検査チェックリストを用いてモード変更・チェックを行い、撮影時に立ちあうことを定めた。またMRI撮影時の機器のチェックについては同チェックリストを用い、放射線技師が行うことを定めた。

【まとめ】

今回MRI対応PMを導入するにあたり検査体制の構築を行った。構築に当たり関連部署が多岐にわたるため調整に苦慮した場面も多かったが、医療安全推進室に間に入ってもらうことで体制を構築することが出来た。またMRI対応外のPM植え込み患者の撮影オーダーを出せなくする等、安全対策も行ったがメーカーごとにチェック内容・撮影条件が異なるなど今後更なる安全対策が必要であると考えられる。

## P-210

### 日本赤十字社臨床工学技士会の研修会の現状と今後について

姫路赤十字病院 臨床工学技術課<sup>1</sup>、秋田赤十字病院<sup>2</sup>、  
旭川赤十字病院<sup>3</sup>、さいたま赤十字病院<sup>4</sup>、  
横浜市立みなと赤十字病院<sup>5</sup>、名古屋第一赤十字病院<sup>6</sup>

○三井 友成<sup>1</sup>、熊谷 誠<sup>2</sup>、脇田 邦彦<sup>3</sup>、鏑田 晋治<sup>4</sup>、  
皆川 宗輝<sup>5</sup>、開 正宏<sup>6</sup>

【はじめに】日本赤十字社臨床工学技士会は、赤十字社医療事業の発展に寄与し、臨床工学に関する学術研究・赤十字人としての職業倫理の高揚・会員相互の親睦を図ることを目的として平成21年4月に発足いたしました。発足1年後より、研修会を開催し、今までに4回の全国研修会とブロック研修会を開催いたしました。今回、我々の開催してきた研修会の概要と今後について報告させていただきます。

【技士会の概要】平成25年2月現在の会員状況は、77施設422名です。主な活動は、年1回の全国研修会および地域ごとのブロック研修会、年2回の会誌の発行、医療機器の共同購入に関する調査・提案、各種統計調査であります。

【研修会の内容】全国研修会は、年に1回開催し、「医療安全」「災害救護」「人財育成」を中心に専門分野を問わない内容を中心に構成している。過去4回の開催で延べ457名の参加があった。ブロック研修会は、顔の見える関係作りを重点に地域ごとに病院持ち回りにて年1回開催している。

【成果と今後】研修会を通じて技士間の交流ができ、顔の見える関係が構築できつつあるのを感じます。良好な関係作りが出来ていたからこそ、東日本大震災において、業務支援に盛岡赤十字病院に2名、石巻赤十字病院に延べ24名を派遣が実現できたと考えます。また、医療安全・知恵の輪～医療機器安全編～では、78施設からそれぞれの施設の取り組みをご紹介していただき、各施設での医療安全の推進に役立ちました。今後は、日本赤十字社医療登録6号をいただいたこともあり、より参加しやすく業務に役立つ研修会を開催していきたいと考えています。

## P-212

### 体外式ペースメーカーの管理方法の策定について

さいたま赤十字病院 臨床工学技術課<sup>1</sup>、循環器科<sup>2</sup>

○富沢 直樹<sup>1</sup>、齋藤 達也<sup>1</sup>、柳川 拓真<sup>1</sup>、岡部 知徳<sup>1</sup>、  
須賀 太洋<sup>1</sup>、齋木 啓太<sup>1</sup>、吉田 幸司<sup>1</sup>、中島 修<sup>1</sup>、  
鈴木 綾子<sup>1</sup>、小野澤 実<sup>1</sup>、鏑田 晋治<sup>1</sup>、松村 穰<sup>2</sup>

【はじめに】当院では臨床工学技士（以下ME）による機器管理業務を行っているが、体外式ペースメーカー（以下TPM）はその対象ではなかった。2011年よりTPMの管理体制を策定し業務を行ってきたので、その経緯を報告する。

【経緯】2011年以前は、心臓カテーテル検査室でのベISINGリード挿入時のみMEが立ち会っていたが、管理には携わっていなかった。そのため、病棟での使用状況を把握しておらず、安全面が置き去りにされた形で使用されていた。以上の状況から、医師、看護師から安全に対する関心が高まり、MEが機器管理業務の一環としてTPMの管理に着手するに至った。

【改善された点】管理業務に着手するにあたり、TPMの台数の把握を行ったところ、4台中3台に外装の破損が確認され、いずれもベISING不全を起こしかねない重大なものであった。ME主導で直ちに機種買い替えを行った。病棟にて使用中点検を行ったところ、TPM本体とベISINGリードを接続するケーブルがないために、規定外の方法で使用していた病棟もあった。正規のケーブルを購入し、誤った使用方法をなくした。また、電池の交換時期が把握できるようにするため、使用後に毎回電池の交換を行い使用日数から交換時期を予測できるようにした。

【課題】まだME内での教育体制が整備されておらず、新人が病棟での使用中点検を行う際のペースメーカーへの機械特性の理解や、知識レベルの合格ラインなどの線引きが曖昧である。【結語】機器管理業務で行ってきたME機器と同様に、トラブルの回避や安全対策には、MEによるTPMの管理並びに使用中点検は必須なものであると考える。今後は全てのMEが高い水準での医療の提供をできるよう、体制を整備していきたい。